

田口冬樹先生のご定年退職にあたって

金 成 洙
経営学部教授

田口冬樹先生のご定年退職に寄せて、私の人生を大きく変えてくださった田口先生のご教授に感謝の気持ちを述べさせていただきます。

田口先生と初めてお会いしたのは、1999年の冬で場所は田口先生の研究室である8号館3階(8327)でした。私は商学研究科の十合先生のもとで大学院修士課程2年次に在籍していました。その当時、十合先生は定年退職間近だったので、博士後期課程に進学したかった私を引き受けることができなかつたのです。そこで、私が考えたのは、商学研究科から経営研究科に研究科を替え、博士後期課程を持っていらっしゃるマーケティング・流通専門の先生を探し、その先生のもとで研究を続けることでした。調べた結果、経営研究科のなかに田口冬樹先生という若くて、学生の評判も高く、研究や教育に熱心な専修大学出身の大学院担当教授を見つけることができました。

私は、この先生のもとであれば研究が続けられると確信し、先生の研究室を訪ねました。研究室に入ると壁の4面が本棚でそこにびっしり本や雑誌が詰まっていたことを記憶しております。私なりに博士課程での勉学の意志と研究分野について説明すると、田口先生はご自分の研究関心とも接点が多いので一緒に取り組んでいきましょうと言って下さり、研究室を退出する際には、「まずは博士後期課程入学の筆記試験に合格することが最優先ですから、頑張ってください」と話されました。

その後、運よく博士後期課程に入学してからのことですが、先生に私の本当の気持ちを伝える必要性を感じて、ストレートに、私は先生のもとで博士号を取りたいという旨の強い希望を話したことがあります。その際に、「博士号を取るためにはどういう条件をクリアすればよろしいでしょうか」と尋ねたことを記憶しております。博士課程での授業でのやりとりの中では常にこうしたことを意識しつつ、会話が進んでいたように思います。当初想定していた韓国の大学への就職には博士号の学位取得が前提となっていたことが私のなかで大きく影響していました。きっと、当時、田口先生は「この人は何を言っているのだろう」と思ったことでしょう。でも田口先生はそうしたことに拒否反応を示すことなく、一緒に考え悩んで進めていただいたことが心強く、研究に本腰を入れ

られたこと、誠に有り難く存じます。この場を借りて深くお礼を申し上げます。

それ以降、博士後期課程の時に先生の「流通論」のTAをさせて頂いたことがありました。TAの仕事で印象深かったことは受講者数が多かったことと、先生はチョークを使って黒板いっぱい文字をお書きになりながら説明した後、黒板消しを使って説明が終わった内容を消すといったことを2～3回ぐらい繰り返したことです。板書の量は多かったのですが、とても分かりやすいものでした。時代によって変化する、一見複雑に見える流通の動きに対して、先生の講義では流通を捉える原理やエッセンスをわかりやすく説明して現実の動きと関連付けて授業が行われており、とても興味深く、今でも鮮明に覚えております。

私はTAの仕事をしながらか、黒板に書かれた内容をノートに書き写しました。それが1冊のノートになっており、今も一生の宝物として大事に保管しております。そのノートに記された流通のエッセンスや原理は、北海道の札幌大学での「流通経営論1・2」、東京の日本大学での「流通システム1・2」という科目の兼任講師を頼まれたときにとっても有効に使わせていただきました。これらの科目に対する学生による授業評価はきわめて高かったと記憶しておりますが、実はよい評価を得たのは私のノウハウというよりも、先生の講義内容の本筋を大いに活用して講義をしたからです。先生にはこのことでも感謝いたしております。本当に助かりました。これもひとえに、田口先生のご指導のお蔭と有難く思っています。教えていただいたことは数え切れず、本当に感謝してもしきれない想いがございます。

続いて先生の教育への熱意について述べさせていただきます。これまでに多くの先生のもとで講義や指導を受けてきたのですが、先生は格別でした。というのも、先生はいつも学生の発言に真剣に耳を傾け、学生の立場や目線で考えてくれたからです。学部や大学院のゼミでは企業訪問や経営者を招聘しての実践的な授業がしばしば行われました。私の場合も、先生の行動力に支えられました。その1つの例が、私が学位論文を執筆中（2002年）、企業訪問（インタビュー調査）が必要な際に先生は日本の企業に自らアポイントメントを取ってくださったり、国内はもとより海外にもご同行してくださったりしました。日本での訪問は、国分株式会社（2002年11月15日、社長室長岡村宏隆氏）と菱食株式会社（現・三菱食品、室長西井勝一氏）であり、韓国での企業訪問は、コロンブス（2002年2月11日、2002年9月12日、部長 Hak-Ku Hwang 氏）と韓国物流（2002年9月12日、次長 Jing-Sok Yang 氏）でした。先生の熱心なご指導のおかげで無事に学位を取得することができ、それによって大学で教鞭を執ることができたことをこの場を借りて改めて深くお礼申し上げます。

先生に教わった学生への教育方針は、今の私の研究や学生への教育方針の源泉となっており、私にとって大変貴重な財産となっております。その1つの例として、2017年9月（3泊4日）に田口先生と本学のマーケティング教員メンバーなどと中国の企業訪問へ行ってきたことがあげられます。その際には陳浩博君（金研究室の博士後期課程院生・助手）が企業へのアポイントメントや通訳などの大活躍をしてくれました。訪問先の1社目は、中国のアリババ社（2017年9月15日、シニアサービスマネジャー Eagle She 氏）でした。先生はアリババ社の戦略の実情やエコシステムのねらいについて予定の時間を超えて、たいへん熱心に質問されており、いつまでも研究への好奇心や情熱を持ち続けている先生の姿勢が強く印象に残っています。そして、我々と一緒に行動した陳君は、ともに学んだことを活かし、博士請求論文を提出（2018年11月15日）しました。これからも先生より教わった教育方針などを糧とし、日々精進して参りたいと存じます。

田口先生からご指導を受けた博士後期課程の院生時代から、現在経営学部で先生と同僚としてご

田口冬樹先生のご定年退職にあたって

一緒に仕事した時代まで、私にとってとても素晴らしい時間でした。このように先生と研究活動を共にし、教育の場でご一緒させていただいた経験（とりわけ学生への教育など）を活かし、微力ではございますが母校の専修大学のご発展のために誠心誠意尽力して参りたいと考えております。

田口先生のご退職は、とても残念で寂しく、名残はつきませんが、どうぞご自愛くださいますよう、先生のご多幸をお祈り申し上げます。長い間本当にありがとうございました。今後とも倍旧のご指導ご鞭撻賜りますよう、心よりお願い申し上げます。